

6 頸髄損傷者に対する就労準備訓練について（その2）

別府重度障害者センター 支援課

高橋文孝、工藤裕司、山下庄二、浦田真由美、梶原清隆、島崎将臣

1. はじめに

当センターでは、就労を希望する頸髄損傷者を対象に、3年計画の事業計画重点事項として就労準備訓練の充実に取り組んでいるところであり、昨年度の中間報告に引き続き、最終年度の進捗を報告する。

2. 頸髄損傷者の就労支援の問題点

- (1) ADL 向上の余地が少ないことから、通常の職能訓練だけでは十分な技能習得ができず修了する。
- (2) 就労経験や社会経験等が少ないことから、職業意識や勤労観が十分持てず修了する。
- (3) 服薬、排尿・排便、体調管理をはじめ、独立した生活が営める程度の社会生活力が身につかずに修了する。

3. これまでの取組み

「就労準備訓練」とは、就労を希望する利用者が自身の障害状況や基本的なスキルを適切に理解し、就労を想定した幅広い技能の習得や自己管理能力、社会生活力等の向上を図り、円滑に就労に繋げることを目的とした訓練である。これまでの取組みの概要は、次のとおりである。

- (1) 初年度(H23)は、就労準備訓練の概要やプログラムを検討する上で基本となる客観的なアセスメント方法を開発する目的から、重度の頸髄損傷者の障害特性等を踏まえたアセスメントツールの作成や、訓練提供体制等に関するスキーム作りに取り組んだ。
- (2) 2年目(H24)は、試行と修正を繰り返しながら、有効なアセスメントツールとして「就労支援のためのチェックシート」及び「チェックシート活用の手引書」を作成し、昨年度の業績発表会にて公開した。併せて、これらのツールを用いた試行訓練を展開し、データ収集やノウハウの蓄積を図った。
- (3) 3年目(H25)は、これまでの試行等の訓練実績を踏まえ、主として一般就労を想定した就労準備訓練のノウハウを取りまとめた「就労準備訓練実施マニュアル」を作成した。試行データの分析と並行してマニュアルの実用性等の検証も行っており、年度末までには3年間の重点事項を総括する予定。

4. 考察と今後の課題

就労準備訓練の対象者には、様々な理由で勤労観や社会生活力を十分に習得する前に受傷した方が少なくなく、それらの向上が大きな課題となっている。しかし、これまでの試行においては、このような根本的な課題に対して次の4つの訓練効果が窺えつつも、必ずしも十分な効果が上がっているとまでは言えない現状にある。頸髄損傷という重度の障害に加えて、様々な理由から十分な社会経験や知識が身に付く前に受傷したケースも少なくなく、そうした特別な支援を要する利用者への就労支援に取り組んでいるだけに、今なお試行錯誤が続いており、さらなるノウハウの蓄積が重要な課題となっている。また、今後は訓練経験者への追跡調査等による検証を行うなどして、一層有効な支援体制を整えていくことが必要と思われる。

- (1) 就労に関する直接技能の向上（業務遂行能力、作業の正確性等、就労に必要な技能の獲得）
- (2) 就労準備性の向上（対人技能やビジネスマナー等、就労に必要な社会性の習得）
- (3) 自己管理能力の向上（就労継続に不可欠な健康管理を含め、生活全般の自己管理能力の獲得）
- (4) 社会生活力の向上（センター修了後も自ら力強く地域生活を送るためのエンパワメントの獲得）